

国際高等研究所は、「何を研究すべきかを研究する」研究所として、1984年にけいはんな学研都市に創設されました。それから30年が過ぎた2014年、初心に帰り「21世紀の世界における大きな課題は何か、国際高等研究所として直ちに取り組むべき課題は何か」について集中的に議論をいたしました。そして2015年より、これからの中の激変する地球時代が直面する深刻な課題の解決に貢献するために、以下の4つの課題について研究を進めてまいりました。

- A) 21世紀地球社会における科学技術のあり方
- B) 人類生存の持続可能性の探求
- C) 多様性世界の平和的共生の方策
- D) 30年先のけいはんな未来都市はいかにあるべきか

地球社会における諸課題の解決のために、学問、科学技術、社会、経済、人類、近未来の都市はどうあるべきなのでしょうか。私たち人類は、今までどおりの生き方や価値観で、この地球上に生存し続けられるのでしょうか。本シンポジウムでは、この2年間の研究をもとに、皆さまと共に人類や地球の未来について考えます。

今回の皆さまとの議論を踏まえ最終報告書を作り、社会に発信していく所存です。

国際高等研究所シンポジウム

激変する地球時代をいかに生きるか —「けいはんな」からの発信—

プログラム

13:00~13:10 開会挨拶 長尾 真 国際高等研究所所長

13:10~13:50 基調講演

〈大阪〉中村 桂子 JT生命誌研究館館長

〈東京〉橋爪大三郎 東京工業大学名誉教授

13:50~14:00 ブレイク

14:00~15:40 基幹プログラム報告

14:00~14:25 有本 建男 国際高等研究所副所長

14:25~14:50 佐和 隆光 国際高等研究所研究参与

14:50~15:15 位田 隆一 国際高等研究所副所長

15:15~15:40 松本 紘 国際高等研究所副所長

15:40~15:55 ブレイク

15:55~16:55 総合討論

コメンテーター

〈大阪〉石田 英敬 東京大学大学院情報学環教授・同大学院総合文化研究科教授

〈東京〉広井 良典 京都大学こころの未来研究センター教授

モデレーター 長尾 真 国際高等研究所所長

16:55~17:00 閉会挨拶

日時・場所

〈大阪〉 2017年6月26日(月) 13:00~17:00

大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホール

〒530-0005 大阪市北区中之島4-3-53

〈東京〉 2017年6月29日(木) 13:00~17:00

時事通信ホール

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8

基幹プログラム中間報告 概要・目次

基幹プログラム中間報告 概要・目次				
A:21世紀地球社会における科学技術のあり方 ～近代科学技術の何を持続し何を変えるか、具体的実践は何か～(2017年6月発行)	B:人類生存の持続可能性 ～2100年価値軸の創造～(2017年6月発行)	C:多様性世界の平和的共生の方策 (2017年6月発行)	D:けいはんな学研都市の30年後に向けて 「けいはんな未来」懇談会 中間報告(2016年3月発行) 及び専門検討部会からの答申(2017年6月発行)	
概要	<p>数百年にわたり築かれてきた近代科学技術の方法、その思想的枠組みと制度体制が大きな転換期を迎えていたのではないか。21世紀の科学技術とは何か、学問とは何か、大学とは何かという根本的問題を問い合わせし、有限資源の地球、深刻な環境汚染、地球温暖化、人間と機械の境界の曖昧さといった人類が直面している問題に対して科学技術活動をどのようにすべきか。日本の経験と特徴を生かして、具体的な方策を考え実践を目指す。</p>	<p>1980年代から2008年の国際金融危機に至るまで市場万能主義が席巻を極め、社会主義の崩壊を受けてグローバリゼーションが進展した。同時に気候変動を緩和するべく、人為起源の二酸化炭素排出量削減の方途が模索されてきた。また、この間、情報通信技術の革新が目覚ましく、人工知能が人間の知的労働を代替する時代の到来が予見されているが、ここ一両年のうちに、反グローバリズム、反民主主義のうねりが押し寄せ、世界は大きく揺らいでいる。こうした激変の下、脅かされる人類生存の持続可能性を担保するために、あるべき科学技術と社会システム改編の方策を考える。</p>	<p>さまざまな考え方、多様な価値観、倫理観、宗教を持つ人々や社会・国家が平和的に共生するためにはどうしたらよいのか。共生を阻む要因とそれを克服する方策を考え、平和的共生に至る道をどう描くかを探究する。そのために、GDPに代わる人間の尊厳や豊かさに基づく未来志向型の指標を提示し、それをもとに、多様性世界の平和的共生に向けて世界的に議論するネットワークの構築を目指す。</p>	
目次	<p>はじめに</p> <p>第1章 科学と社会の関係</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本稿における「科学」の定義 2. 「科学」は何ができるか 3. 「科学」への社会の期待は何か 4. 「課題解決」型の科学を進めるにあたって 5. 日本社会における科学の受容 6. 科学の「修正必要」部分とその方策 <p>第2章 現代世界の状況に応える科学への期待</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 時代と科学の変化 2. 日本の科学の現在と過去 3. 科学と社会の関係の変化 4. 日本の科学の現状と科学技術行政の課題 5. 日本の科学の未来 6. いくつかの提案 <p>第3章 転換期における人文・社会科学の役割</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「転換期」と人文・社会科学系の役割 2. 科学と社会を導く「語り」の転換事例 3. 「イノベーション」が引き起こす疲弊とSDGs 4. 日本における人文・社会科学の課題 <p>第4章 ポスト近代科学技術を問う意味</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 原因と結果 2. 内側と外側 3. 思考と行動 <p>第5章 ヒトが紡ぐ学問</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 序 2. 問題に目が向かない 3. ヒトは何でもでき、何にもできない生き物である 4. 未来につなぐ <p>第6章 大学の基礎研究機関としての課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学教育現場の実態 2. 若手研究者の育成のしくみ 3. 大学の役割としての基礎研究と技術移転 <p>第7章 21世紀地球社会と科学技術の役割と責任</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 近代社会の歴史的転換と日本の位置 2. 近代科学技術の歴史的転換 3. 21世紀における科学技術の方向 4. 21世紀地球社会における日本の科学技術への提案 <p>第8章 21世紀における地球社会</p>	<p>序章 科学技術と持続可能性</p> <p>第1章 資源エネルギー</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 技術の選択肢：いま何が可能か 2. 再生可能エネルギーと今後の経済発展 3. 持続可能な低炭素社会 <p>第2章 人口と食料</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 世界の人口問題 2. 日本の人口問題 3. 食料生産の持続可能性 4. 持続可能な水供給 <p>第3章 気候変動の緩和とそれへの適応</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. パリ協定は機能するのか：その評価と課題 2. 持続可能性の意味を問い合わせ 3. 持続可能な都市と交通 <p>第4章 反グローバリズムとポピュリズム</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人類生存の持続可能性を脅かすポピュリズムの台頭 2. 米国の政権交代とパリ協定 <p>第5章 シェア・エコノミー；ミニマリズム；限界費用ゼロ社会</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 限界費用ゼロ社会の経済学 2. カーシェアリングと自動運転 3. 何のためのミニマリズムか <p>第6章 経済成長がすべてなのか</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 資本基盤の持続可能性 2. 経済成長と民主主義 3. 市場経済の限界 4. 人工知能と雇用 	<p>序章 目的と中核要素</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. はじめに 2. 研究の方法 3. 指標の試み <p>第1章 基軸概念</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 多様性世界 2. 平和的共生 3. 平和的共生の方策 <p>第2章 平和的共生の新しい指標と調査計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 意識調査項目を作ることになった経緯と狙い 2. 本調査の特色 3. 本調査が持ちうる社会へのインパクトとデータの普及 4. 調査の計画 5. 意識調査（アンケート調査）項目 6. まとめ 	<p>「けいはんな未来」懇談会 中間報告</p> <p>はじめに</p> <p>第1章 30年後の社会を見据える「けいはんな未来」懇談会のあり方</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 30年後の社会を見据えるということ 2. 起こり得る未来を認識する 3. 30年後の課題感 <p>第2章 けいはんな学研都市の現状</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究・開発 2. 産業 3. 文化・芸術 4. 教育 5. 住民・生活 6. 都市基盤 <p>第3章 けいはんな学研都市の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究・開発 2. 産業 3. 文化・芸術 4. 教育 5. 住民・生活 6. 都市基盤 <p>第4章 30年後のけいはんな学研都市のあるべき姿、ありたい姿</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 持続可能な街づくりを目指して 2. 文化的資産による地の利の活用 3. けいはんな学研都市のコンセプト基本概念 <p>第5章 30年後の街づくりを考える時のポイント</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究・開発 2. 産業 3. 文化・芸術 4. 教育 5. 住民・生活 6. 都市基盤 <p>第6章 30年後の社会に向けて</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 奥行と広がりのある街づくり 2. 次の10年の方向性仮説 3. 30年後の社会に向けて <p>第7章 これからの取り組み</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アプローチのあり方 2. 目指すべき方向性 3. 大学との新たな関係の構築 4. シンクタンク機能を中心とした知の協業と発信 5. けいはんな学研都市のあり方を検討する目線 <p>「けいはんな未来」懇談会専門検討部会からの答申</p> <p>はじめに</p> <p>第1章 6つの観点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究・開発 2. 産業 3. 文化・芸術 4. 教育 5. 住民生活 6. 都市基盤 <p>第2章 提言</p>